がん社会を診る

中川　恵一

「一がん息災」の考え方

「無病息災」をだれでも望みますが、人生100年時代、まったく病気と無縁の人は例外的でしょう。日本人男性の3人に2人、女性の2人に1人が、がんになる時代ですから「無がん息災」は少数派です。

「一病息災」という言葉があります。一つ病気があることで、体に気を配り、健康を保つことを意味します。

がんでも、一つのがんになると、次にできる別のがんは早期に発見される傾向があります。「一がん息災」です。

1人の患者が、複数の臓器がんに罹患（りかん）していることを「多重がん（または重複がん）」と呼びます。初めのがんの診断とほぼ同じ時期に診断された多重がんの頻度は2～17％にも上ります。

喫煙、飲酒など、がんのリスクを高める生活習慣を持つ人は、多くの臓器にがんができやすくなります。遺伝はがんの原因の5％にすぎませんが、特定の遺伝子変異を持つ人に多くのがんができることもあります。ヒトパピローマウイルスは子宮頸（けい）がんだけでなく、扁桃（へんとう）腺や肛門にもがんを作ります。

とくに、口腔（こうくう）や咽頭のがん患者では、食道にもがんができることが多くなっています。学会のガイドラインでも、こうしたがんでは、食道の検査もしておくように推奨されています。

タレントの堀ちえみさんはステージ4の口腔がんで、舌の6割を切除して再建手術も行うなど、手術は11時間にも及んだと報じられています。

しかし、その後の検査で見つかった食道がんはステージ1で、内視鏡で簡単に切除ができました。まさに、「一がん息災」を地で行った例といえるでしょう。

「がんの王様」と呼ばれ、全体の5年生存率は1割にも満たない膵臓（すいぞう）がんは早期発見が難しいのが特徴です。治癒が期待できるステージ1で発見されるのは、1割程度にすぎません。

しかし、東大病院での調査では、肝臓がんの治療後に見つかった膵臓がんの6割がステージ1でした。肝臓がんの再発を確認するためのコンピューター断層撮影装置（CT）検査を頻回に行うため、早期の膵臓がんが偶然見つかるためだと思います。ぼくこうがんに罹患した私も、「一がん息災」をめざします。

（東京大学病院准教授）

イラスト・中村　久美